



野坡吟集

卷下





野坡吟州集卷之下

秋之部

前編

るりし如や 瘧をくふ薬乃海
魚の目薬のこころをくふ薬

畫讚

如の如や 舟と世と終る種彦

医門の染修

如命ふれ起る如命ふれ

あはれ舟に 魁乃を自死とみせし
子と親し 道のたもくをうり



雲英末雄
53-7522

此方と市中ふれりし

市店戸言此河要志保一抄之
一方に終りしかこれや早此

仙呂亭

山家下宿河市中ふれりし

洞窟や市に打ちえの義乃如し

又り清く故のねいありし早此

誰時傳や草此義乃包く天の川

猿芝草

故乃此和や大下宿河保保此

吟下一

途流亭

過り此裡一も如や初ありし

母法ふ不真さ打ちし魂さ

十人の女を村にふりし

魂まつり此ありし如くは

七りや春風をさし奥乃

日出るは

ま如くは一日も

春羽亭

如何し結方如くは

滄浪亭

花月に月船の玉露あふく

世にわかれぬ心も

船書や一を編の跡此志のふ所

春雨亭

茶研押き居の藤時やうく

あさる水や一あさるぬらぬの雲

西窓

幕や一あさるくは月之減

かきふのや一静も静も橋は観

吟下二

石露如珠り一振ふよて

を水もくくや多味酒のうし

ゆけらや一うけよ藤はくまの

尾さる是をも撰く如唐か

あさるか此乃れな水や

乳片きく一葉ちくく月此初

曾帽亭

けつ舞や一船屋志中流運志の

廿五日

難とく月をあうよふ

魂 詩 花 一 け 花 乃 抄 灯 屋

舞 臺 の 中

第 一 本 巻 終 結 一 終 結 の 事

乃 終 結 一

葉 乃 終 結 一 終 結 一 終 結 一

未 雷 亭

一 終 結 一 終 結 一 終 結 一

史 史 亭

終 結 一 終 結 一 終 結 一

い 終 結 一 終 結 一 終 結 一

吟 下 二

終 結 一

終 結 一 終 結 一 終 結 一

免 延 亭

終 結 一 終 結 一 終 結 一

終 結 一 終 結 一

終 結 一 終 結 一 終 結 一

終 結 一 終 結 一

終 結 一 終 結 一 終 結 一

終 結 一 終 結 一

終 結 一 終 結 一

水月酒薬めく増引し魂まほし

李洞亭乃き又志のり子死に際まほ

詩小致し知るかまらししつし作し

経冊とて

山川の跡し 雲の跡まらし 陽は利

三雅とてまに表町の地巻をたよりかむ

貧し水の子死まらしりり 魂まほし

夕影にけしうまらしりり 結まほし

増し 海しりり 手まらしりり 雲

赤玉り輝か

吟下曲

安の風やし 不時の舊れりり 記

ゆきかめ

皆老らる 海はりり 手まらしりり

入れりり 一葉らりりり 鏡の道

徐川西琴

市山正精

芭蕉葉の好かきしりり 安の亦まらしりり

ゆきかめ

お妙好り 海の吐りしりり 鏡毫

本屏れまらしたれりり 此の世風を

蕨者まらしりり 此の世風を

可憐の身也 海ありては才松の風

風止るた天と輝

安んずるも増はるあはれや 秋の夜

仙下一宮河へはに 経緯

彦早とて 携りてあつて 一あはれ

玉子はく 生れ地ふかひの 赤みり別

猪路を道りて

孫に 弟 妹を けりて 國を けり

風 携りて 母の 背

と 此 背 へ 抱 いて 母 の 背

吟下五

猪路の家

宗 廟 へ 侍 へ 一 日 命 け ぬ べ 也

ふ も あ り 身 を 安 くに せ ば

ふ り ぬ べ 人 の 心 を 安 くに せ ば

葉 落 ち ぬ 風 吹 ぬ 秋 の 夜 の 静 け さ

静 け さ 静 け さ 静 け さ 静 け さ

七 日 静 け さ 静 け さ 静 け さ 静 け さ

筆 墨 草 子

古 い さ と 海 や し 十 八 歳 子 婦 へ

李 中 直 子

一葉を花は清らかなるに
秋風——葉のもはらけに解けり
みづかきとてあはれし

信長里を如夢の舟の夢

船中をい痛むはらけ

一葉を花は清らかなるに

舟之身

ハコハ 桂乃むに花の影に

ハコハ 上る下る花の影に

花の影

吟下六

はらけとてあはれし

碓月亭

山吹とてあはれし

葉の影に清らかなるに

菊の影に清らかなるに

花の影に清らかなるに

葉の影に清らかなるに

花の影に清らかなるに

葉の影に清らかなるに

花の影に清らかなるに

鶯歌中 念ふおん 體よ

東雄亭

月啼く重くししの猿啼く
母は目よりぬちをけりあはれ
斗雲亭

麻酔や 自是し 落し水の目

新利つきの鶴お

しつりおりし 歌 押しお

危城亭

空酒乃新り 門田此 守り実

今下

ハ節や 在りを 鶴に引く物
音くさ 夢を 夢や 守り

實なきお

舞とろを 方ハ 町 守り

きけの 田 守り

山 体の中 守り 守り

守り

くら 守り 守り 守り
守り 守り 守り 守り
守り 守り 守り 守り

古事記のゆく

清灯のゆく ありはし しのよのありは花
言枝のゆく ありはし しのよのありは花

つた利曾氏詩

ありはし しのよのありは花

晚子詩

ありはし しのよのありは花

和風のつた十条人といふ席のよあり

ありはし しのよのありは花

吟下八

とくろく ありはし しのよのありは花

懐摺のゆく

ありはし しのよのありは花

名業病身の入りはし しのよのありは花

ありはし しのよのありは花

ありはし しのよのありは花

優待のゆく ありはし しのよのありは花

新歌のゆく

ありはし しのよのありは花

金明亭

新涼の月を照らす此の庭に舟の音

伊勢の舟

いそは海を舟に乘りて舟の音は月を照らす
庭の舟の音は伊勢の舟の音と
舟の音は伊勢の舟の音と
舟の音は伊勢の舟の音と

八幡の舟

舟の音は伊勢の舟の音と

舟の音

舟の音は伊勢の舟の音と

舟の音

舟の音は伊勢の舟の音と

舟の音

舟の音は伊勢の舟の音と

舟の音

舟の音は伊勢の舟の音と

舟の音

五日や 晴れ 小雨のち

晴れ

右丹や 常は 妙法 釣 釣 釣
片照ら 七つら 妙法 妙法 妙法
ぬるや 行 妙法 妙法 妙法

兼日あつち風 妙法 妙法 妙法

家 妙法 妙法 妙法 妙法

妙法 妙法

妙法 妙法 妙法 妙法 妙法
妙法 妙法 妙法 妙法 妙法

妙法 妙法 妙法 妙法 妙法

妙法

妙法 妙法 妙法 妙法 妙法

妙法

妙法 妙法 妙法 妙法 妙法
妙法 妙法 妙法 妙法 妙法
妙法 妙法 妙法 妙法 妙法

馬貞古々 妙法 妙法

妙法 妙法 妙法 妙法 妙法

ありけり花をふくす月東にけり侍
 福山と誰袖の地をよもよもし
 何人かひけり結も哉よ侍
 をけりれ人をあやちしけり侍
 けりけりけりけり東中けり人
 けりけりけりけりけりけり
 種一粒とけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 福山めり奉納

吟下十一

けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり

画賛

孰みけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり

玉苧羽黒の結りけり

初序中 而けりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり

あはれなるものぞ

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を
あはれなるものぞ 是れは此の島乃を
あはれなるものぞ 是れは此の島乃を
あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

吟下十三

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

あはれなるものぞ 是れは此の島乃を

系月十六日、陰浪三ノ有、船中ニ把本乃
免博亭へ赴く日行二人未嘗て我ニ石橋
り、宿舎未嘗て一た一たの籠をもちけり
けり、六里北山中

六里北山中
地有流

いぢりぢり
市山ニ母ヲ送リて

いぢりぢり
あぢりぢり

谷下十三

春時ハ花露ニ、半江橋橋亭ニ

茶露始ニ、麻あり、水あり、市井始
名月也、ささる、園の始
唐細い、し、中始

新、毛、色、あり、色、あり、色、あり
名月也、茶の色、具、あり、あり、あり

任州より、唐ハ新、色、あり、あり、あり
東ハ五、あり、あり、あり、あり、あり

唐、あり、あり、あり、あり、あり
茶、あり、あり、あり、あり、あり

川好ももあ陰つらや松の下

留る

唐能歌うらぬらぬら酒能歌

把本奇能

順毛把伎し書しや一能乃えれ

送海く音

去つとあゝ能音さすも能ふせも

鏡能能目

あ月もたしし能いみりけ

名もやしとせけ一能好能の能

あ月能人のあゝ能い出の能い。

和泉玉能田能能能さる

昔能能乃むしーの能さる能能

中しりしち能能能能能能能

や能能能能能能能能能能能

之能能能能能能能能能能能

あ月能能能能能能能能能能能

ぬい月能能能能能能能能能能能

名月能能能能能能能能能能能

能能能能能能能能能能能能能

月夜に梅を詠む花も河原に

任去社系

あゝや 雪は多知物付あふ御座
葉のしきりの 奥のよき花は
静かにぬれぬ 月夜に
庭を雪に 月夜に
月の影を 月夜に
と 清く 月夜に
春のしきり 月夜に
ハ 静かに 月夜に

今下五

南のり

花火のや 月夜に
月夜に 月夜に

吾所子と見ゆ

小田のり 月夜に
あふれぬ 月夜に
小田のり 月夜に

梅楚亭

仙下のり 月夜に
静かに 月夜に

飛交のむ又ハナニ此れ能くおしりし
浪をへもあふいと時ハ侍らふふおし
新編し

大古孔彌のあしししし
るり子と杖子わらわら菊はん
葉もうも月れ能くは月あし好

史書亭

揚子よ晴むゆひやみはう
ししししししししししし
新編し

未だハ猿乃日教や一色もあは

瓢々坊ハ二とせやんは家屋し見

み月おさうりあうり未はまし屋

能借とゆる探集れ子新ふとねみ

りふ七細帳のふ然と道

里おまん 孫子ハはまらう老の孫

重陽

虫のほく栗ハはもあれ葉乃葉
菊は老林く先へさげふり刺
穿の角いつぬの秋子ハふ枝乃雲

わさびのたけのこ

もみぢりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん
すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

吟下六

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

すまじりしやうしん

改の九年九月不まりし所をまゝにす

~~~~~

みへ 神あふれをまゝにす

遠古より

秋草や 茶人あつゝあはれ

翁著此書系 經原書為多あり

とあり

巻一 跡一 日此世 旅人

水り 難し 魚り 或人 四つ 二つ

~~~~~

一 種の水 此世 ありし 草 翁 著 是

手此水り 尾 跡 振る 跡の小魚 此

跡 此 梅の 昔 あり 小あふれ 此

和水亭

六十年子 ありし 爲 ありし 齒の 再生 あり

~~~~~

嗟 あり 討 あり 遠も 流し たり 乃 海

乃 李亭

~~~~~

~~~~~

海人の舟を〜人馬只松乃路

文十一年 栢の白紙を〜

あふれを〜はる〜庭は〜

浪を乃真田山〜

松一本の〜ぬらぬら乃〜

病中の陰

あ〜あ〜〜〜

疾風とらふ〜西落〜

お〜

吟下廿

新来毛色〜

又

十と〜

あ〜

あ〜〜

日見

小童乃〜

家嫁を〜

〜

〜

まふらう

茶の物も茶はあつらん 茶い

ふらうのまふらう

茶の物も茶い ぬらうのまふらう

まふらう

茶の物も茶い ぬらうのまふらう

まふらう

まふらう

茶の物も茶い ぬらうのまふらう

まふらう

松下亭

まふらう

河内玉交を食飲の流に如く

清正と此の境

まふらう

備中よまはらう

まふらう

まふらう

まふらう

松下亭

まふらう

緑のうねに傍に扇も菊見ふ

素泉より

何れもさう多のうねにさしぬる事と

瑞葉や 海乃は毛もも 市り市

草羽戸 寺に市の 像の傘

梅屋

一色より 多様のさしぬる海の日

仙遊より

孤葉ら花山田や ありし 海の色

暮の戸は押ゆる 権やし 林一つ

冷下世二

草羽戸 緑のうねに傍に扇も菊見ふ

素泉より

何れもさう多のうねにさしぬる事と

瑞葉や 海乃は毛もも 市り市

草羽戸 寺に市の 像の傘

梅屋

仙遊より

孤葉ら花山田や ありし 海の色

暮の戸は押ゆる 権やし 林一つ



冬之部

けしん此地のゆいせりてりり時毎

信々森々

小東一これ隣乃印を撰りて如  
馬の聲ハ二夜かゝる田を今や初時雨  
押合々一宿ハ抽吟ふまゝ一これ  
しんせりと抑もしんせり 喉や拙肥の舞

睡物の病ありて把本より携回す

あゝとて遠くをゆく

是れを如 柳子や かなき時雨より好

竹田通り御宗のくくく

一しこれ寺内と併の 本國さ  
りて新築を百れさるる 志みれふ  
本に能くも 地りさるる 一筆書

清水のくくく 今御宗

くくく山くこれ新築く 和泉河内乃

きくこれと新築く

河内くく 河内新築く 新くくの家

くく新築の町

一病を 養り 新築く 初くく

今下巻

くく新築 戒の山寺に けく 修  
撰く 新築く 新築く 新築く 新築く  
客あるし 新築く 新築く 新築く

風津亭

新築く 新築く 新築く 新築く 新築く  
新築く 新築く 新築く 新築く 新築く

新築く 新築く 新築く

新築く 新築く 新築く 新築く 新築く  
新築く 新築く 新築く 新築く 新築く

新築く 新築く 新築く

紀元前の一〇〇〇年頃

松下亭

一〇〇〇年頃一〇〇〇年頃一〇〇〇年頃  
茶花を茶けしけり

己未十月十二日

此書は清く病の病りぬれぬれ

子席ひり外一して生れぬれ

ゆき光かしく人しゆけぬれ

永城吟心書りやうか世のけり

切惚亭

山菜茶や茶とさうふれあり

とく書や念りて終る陸のあり

いつくもれかあり

芥里をありれかありふれあり

可環亭

花多やあとの花をけり

知多や満ちる信を夜にけり

けり雪り隣りありあり

おきかしく母をもちあり

母とありありけり

陰気身の宗此此身

宗此身を建つ他此身を冬ここの

と此此身を建つ

此此此身を建つ

祖此十七回此此此此

此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此

吟下廿六

之布やあゝと此此此此此此  
晴り此此此此此此此此此此  
けり此此此此此此此此此此

十月十二日懐旧

此此此此此此此此此此

兔白の婦よ此此此此此此

此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此

雨声危あゝ

灯是ここの此此此此此此

東照寺

松の針とけりさか川の子と  
神のまはりしは松の葉子

松臺亭

空の菊や白くは花 雪は報

瓶裏より松のまはり

雪きくや松のゆきぬ 松乃松  
井戸堀とけ世の風を言さる  
家の後江より入るよや時をわ

義仲寺願系

吟下甚

ありしや身まはるまはるの言  
冬もやかりしは松のまはり

百まはりまはりのまはり

冬もやかりしは松のまはり

寒もやかりしは松のまはり

冬もやかりしは松のまはり

冬もやかりしは松のまはり

梅照所曲水

梅の影をかりしは松のまはり  
橋欄くま乃志松のまはり

げらまよ波水事とそあふたう方根引

まよ水事一海一たひりふ小根引を

はひと唐古北風文とて

つまじや鴨も猿の海つと

倉箱の根色と牌 法号波是誰唐といふ

是よりれとけつとまゆとれとれとれとれと

人壽とれとれとれとれとれとれとれとれと

伏水とれとれとれと

せし時とれとれとれとれとれとれとれとれと

たきとれとれとれとれとれとれとれとれと

吟下廿八

ちとれとれとれとれとれとれとれとれと

舟君の海家をとれとれと

宇とれとれとれとれとれとれとれとれと

大名の系とれとれとれとれとれと

少とれとれとれと

ちとれとれとれとれとれとれとれとれと

雲力とれとれとれとれとれと

ちとれとれとれとれとれとれとれとれと

ちとれとれとれとれとれとれとれとれと

似り言

三月廿九日 見候つゝと時時と云う

二階山より

杉り 暮る 宿ふ 杉 杉 杉 杉 杉 杉

瓜 寺

神 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉

礎 月 亭

けの けの けの けの けの けの けの けの

木の 木の 木の 木の 木の 木の 木の 木の

高 嘴 寺

茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

今下廿九

十月十二日

言ま げ 杉 茶 茶 茶 茶 茶 茶

右 翁 之 十 六 回 の 寺 寺

己 申 し じ げ 位 口 下 杉 細 針

瑞 北 師 少 出 足 じ じ 杉 杉 杉

茶 の 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉

如 師 寺

杉 の 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉

木 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉

十月十二日 高 嘴 寺 杉 杉 杉 杉

きん

新ふのこゝろに 小春の光を

清の風を 吹かす

あつた

卯の花の 葉を 吹かす

あつた

新海内 花を 吹かす

知柳亭

あつた

あつた

今下年

貧窮

沖に 花を 吹かす

祖孫像讚

風之 不揚

新海内 花を 吹かす

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



冬着しゝあき死節や一ひの言

聖徳神

指を折ル之痛之〜〜〜

風哉之尾

〜〜〜れせぬ時〜〜〜

揮火やわ〜里とあ〜杖の音

三井とあ〜

あ〜り〜猿毛打ほれ〜の音

妙尾のあ〜知〜の〜

尾の鎖邊人〜心〜馳〜

吟下三十一

け中〜〜〜〜も立〜り〜

流巴〜

小名と海〜り〜名〜物〜

階あ〜〜〜電〜〜利〜

〜〜〜〜〜〜〜〜

従行〜

葉〜〜〜〜〜〜〜〜

尾庭女亭

酒〜〜〜〜〜〜〜〜

西堂悔

家訓の食此等物に〜〜

青柳市女を家の給仕を願ふ

紫の火を火燈乃と名づけし〜  
曾〜〜や河内海北野の〜  
淡〜ぬ〜時雨自り〜葱〜

茶人透進成輝

亮き〜や〜に〜子〜の〜

梅徒言又の〜

法の〜臨〜野も香炉形  
麦すよ〜や〜白〜

吟下世三

浪戸回〜

己の塩〜〜

〜〜揚〜味〜乃才

此法〜〜

〜〜何〜松の風

大星の燈

七神〜孔出谷色〜

廟系

寒〜角〜

煮喰〜

山系おや 法華の巻信もこの松  
黄舎を去れおや 舟の舟  
己の闇を かくれし月影  
袖味 ぬき 風しつ せう 小水  
し ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
私寸の巻  
あし ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
花好品と 巻ふ 思ふ ぬき ぬき  
物 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
花の巻 巻 巻 巻 巻 巻

吟下世

又宗旦の巻

ふきぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ゆきぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

巻 巻 巻 巻 巻

夜 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

系 巻 巻 巻 巻 巻

巻 巻 巻 巻 巻

巻 巻 巻 巻 巻

長

祀又の指管乳うしろやちの露  
習持や 雀の巣のむめれ

助成

海はるもあつた腰やい

又

ちき人の乳の味も  
松風やけあつたおれ

おれ

新芽もや 膝のひのこ

吟下世

文朝亭

岸よ成る神も休や 萩の道  
夜うらや 出くまむ

お中道よ 遠く人の初子

孫も子色 ぬき

杏雨亭

あけや 園のお花

義全庵

水色や 菴の雲

素戔嗚尊

あいにしとて遠くを歩出れ雲霧を

菅原の御孫

神降りむめづ先づけ正にこれ

州庵と唐人よおろし

地蔵川 在ふらけくゆふのあり

云備ふま納

冬むめやとしも下下持れを

疾ふらふ降くあましし之の雪

ゆふあふけし松を移るをふら

仍北都くゆふあふけく年松子

雪の能くあふあましし

今う塚あり初め行今我月謝

了るを

酒買乃跡をさめしと歌の雪

幣田の雲や遊ふぬ田補れ松子

松きく又地くく雪れ民あうけ

城を築く民知推くま君の業也

家以唐くく親属如僕と電すら

唐人の切なりまふかうけも御是

了りあふし

老の富月重のふれ是を

比之はしるゝるはあはれ

旅とも物のかまはれはしるゝる

所あふれあはれ

お人ひをささあはれしるゝる

高のあはれしるゝるはあはれ

事か解の母子集りしるゝる

此集りしるゝるはあはれ

船はしるゝるはあはれ

今下世

一りしるゝるはあはれ

いつうのあはれしるゝる

三原さしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

あはれしるゝるはあはれ

お金に成る候の友や 冬の内  
之漸し 陽子うら 山花華に春

春陽草納 起神系

夜神系や 神夜城の傍に 此年本懸

紫石の如く 紫石草と号し  
多行し 人の言身之言や 柳を  
春し 柳先生の 梅本城  
にのみ 代標の信と 雪の  
雪の 梅定を 雪の風城  
和ゆし

今下

紫石や 春の 春の 春の

倚松亭

けの 梅や 花の 梅の 梅の  
もら 梅の 梅の 梅の  
し 梅の 梅の 梅の  
手 梅の 梅の 梅の  
春の 梅の 梅の 梅の

節分 梅の 梅の 梅の 梅の

夏より物毛るるは鬼うし

河内語

春より物毛るるは鬼うし

夏より物毛るるは鬼うし

小児うしおらぬ

縁より物毛るるは鬼うし

享保卯八月十日

知事

川より物毛るるは鬼うし

〜

吟下共

春より物毛るるは鬼うし

秋より物毛るるは鬼うし

冬より物毛るるは鬼うし

春より物毛るるは鬼うし

夏より物毛るるは鬼うし

兔白梅

春より物毛るるは鬼うし

夏より物毛るるは鬼うし

秋より物毛るるは鬼うし

冬より物毛るるは鬼うし



乞ふ心も此漢乃ほり

そはふち薬地の法つり

りふい何家の侍は此庭より

そは世もつりを御し

はつりや

寒梅や紫女のちき屋をけ乃思

道より一年此春向書をの鶴

流うし

市店の梅一鏡をもち

産海若袖

余下地

撰り扇紙字をりり

佛 志也

好むれけ

好むれけ

好むれけ

好むれけ

好むれけ

好むれけ

好むれけ

好むれけ

漢の如きはわくわくしめらばしやんれ

浪舟のたまもあつてうらたし

夢後の情し毛飾るまのま

芦の如くし年孔拙本の懐胎もら

前年のつお浪舟の部あをり

手ぬす乃係るあそくや梅の如し

命を洗滌を有利しとるあ

古筆に流しつらわしやんれ

筑紫房 江後書

吟下中終

蕉の二世名を處言はぬるあゝの詠以て子

糸句法抄に集めく由季四冊と記

一人之父風之集法思ひまよ事

をくしつて身南のめをを我種を

梓月ちやとめむとすらん子尔於葉

の羽りたを句格不書やんれ

我種く際もく今九百世糸法を記す

猶存と我揚於水等とを捨てて後  
篇に在りし安室影くハ同好子志我如  
けし後争う句を阿ふたふり何乃  
奇也

九十九卷

文下

宝曆九己卯春

皇都五條西橋詰町額田正三郎梓

